
薄桜鬼 ~鬼姫と呼ばれる鬼~

?ユッキーは魔王様?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄桜鬼～鬼姫と呼ばれる鬼～

【Zコード】

Z0474Z

【作者名】

?コツキーは魔王様?

【あらすじ】

届かない声 わからぬ自分の存在理由 でも確かに生きている
記憶がない少女が今ここに!!

主人公設定（前書き）

薄桜鬼で新連載

やつちまつたよー！

主人公設定

主人公設定
名前 紅月 夜宵

年齢 18

身長 161.2

体重 「言わないよ」

容姿 整った顔立ちで可愛い瞳が深紅色で髪色が銀色みたいな白髪

性格 強そうに見せるタイプだが実は・・・

好きな色 灰色 水色

詳細 親に捨てられたと勘違いしており、現代で生きてきたが突然トリップし幕末へと行く

記憶が無い

親の名前

香苗

詳細 夜宵の母親で現代に送つた本人

隆哉

詳細 記憶を消した本人夜宵の父親

両名ともに「くなっています」！

ヒロイン書いてほしいです

主人公設定（後書き）

とりあえず終わり

第0夜～プロローグ～（前書き）

現代です！！

第〇夜～プロローグ～

「ハアハア・・・・ハア・・・・ハア

またこの夢

私には記憶がない

なのに何故？

古く大きい建物と言うより城と言つた方がいい建造物

だがそれは

古く

現代にはあまり見かけない建物

その奥には私が居てふすまから見える外の風景を眺めてる

その風景も現代とはかけ離れている

まさにその時代は

江戸や幕末といった方がいい景色

そこにはもう1人女の人人がいる

その女の人に向かって

『お母様』と呼んでいる

そこから場面が変わつて

私のまわりは

赤

紅

赤

紅

ア
力

ア
力

炎の赤

赤ばつか

そして

血の紅

それともう一つ

5

それから

黒い闇が広がる

いつもやじで途切れ起きる夢

でも

リアル過ぎて

怖い

黒い

真っ黒い闇に取り込まれそうで怖い

怖い恐いコワイ怖い恐いコワイ怖い恐いコワイ恐い恐い恐い

「夜宵」ご飯

『つ！！！ハーヴィ今いく』

今の声は私の義母さん

あの雨交じりの雪が降つてゐる日私は義母さんに拾われた

いつも通りの学校

でもやの日は

いつもと違っていた

「紅月さん？」

『やうですけど』

私が一人帰つていると声をかけられた

振り返ると

キレイな女人

「これを夜宵様に」

そういうて差し出されたものは

『刀？』

そもそも様？っておかしい

「その刀はあなたが本来持つべき刀

月光華
『月光華？』

『月光華？』

「あの子たちを助けてください

我等の姫であり宝の鬼姫様』

『えつ何言つて？？』

私が目にしたのはきれいな

狂い咲きの

桜

突然上がる突風

振り返るとさつきの女の人はいなくなっていた

桜の花びらが一枚一枚散つていく

すると何故か眠くなつていった

そして私の意識は

闇に落ちてつた・・・

第0夜～プロローグ～（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想欲しいです！――――――――――

第1夜～出会い～

「・・・つウ・！－」これは？

まだ朦朧とする意識・・・

そして

手元には・・・

さつきの人気が持っていた・・・

『月光華』ゲッコウカという刀

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

「ツー！」

突然聞こえた悲鳴

・・・

行かなきや

と

そう思つた・・・
・

私は走つた

そして見たものは

あの夢と

私と同じ瞳と髪色の

化け物

その奥には

男の服装をした

女の子

助けよう

そう思い私は

刀に手をかけた

「大丈夫？」

「えつ・・・・・・・ああ　ハイ！・！・！」

「そ、うなら少しじつとしててね」

「えっでも

「いいから

そして私は

『月光華』を振るつた

ザシユ

終わつた

そう思つた

だけど・・・・・

「うーーーーー」

ここつも私と同じ

なのに

ここつと私の違い

それは

血に狂つてゐる

か

狂つてないか

このままじやうけいがやられる

だから！！

心臓を

斬る！！

血辺きが舞う

それを浴びる私は

残酷な生き物

突然私は人の気配を感じた

「誰？」

「ああ～～バレちゃった

「總司ふざけてないで」

「はあ分かってるよ

一君は五円蠅いなあ～

「何する氣?」

私は聞いた

「何つて？？斬るんだよ」

キンッ

「なぜ切られなきゃいけない？」

「『アレ』みたでしょ？」

「だからなんだ？」

「フーン気が強いね」

「はあ」

私はボソッとメンンドとため息交じりに吐いた

そして聞こえたのは違う人物の声

「セーしまでだ」

「今度は誰？」

背後に見える雪

そしてさつきの女の子の前に刀を向ける男の影

私はひとつ

「何してるんだ

その刀をしまえ！」

ドサッ

彼女は気絶し倒れた

力チャン

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

「「「！」！」？」」

私は急に眠気が来て

倒れた

（沖田SIDE）

僕は彼女を見たとき息をのんだ

髪色などが『羅刹』に似ていたから

でも彼女のことをきれいだと思った

「誰？」

突然聞こえた声に僕は我に返った

土方さんが

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

といった瞬間

僕の方に倒れてきた

柔らかい肌

綺麗だと又思った

この時から僕は『恋』に落ちたのかもしれない

～ SIDE OUT ～

～ SIDE 齋藤～

綺麗だ

そう思った

刀を振るう姿がまるで

蝶^{てふ}のよつな

そして髪色も何もかも

『羅刹』と同じなのにきれいだと

SIDE OUT

SIDE 千鶴

助けてくれた女の人は

とてもきれいな女人でした

一つ一つの動きが華麗な動き

そして凜としている声

月明かりを浴びている髪色が銀に光り

綺麗だと思った

～ SIDE OUT ～

～ SIDE 土方～

最初は可哀想だと思った

だが次の瞬間

綺麗な女

と思った

俺が

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

といった瞬間倒れたのにはびっくりした

が

沖田が支えたので安心した

が

この気持ちはなんだ？

{ SIDE OUT }

第1夜～出会い～（後書き）

いぢおー

終わり

第2夜～自己紹介～

・・・ツ・・・・うん・・・此処は?』

私が目を覚ますと手は縛られ足も縛られている私と女の子

昨日の出来事を思い出し

私は目の前で寝て いる女の子を起しそうと 思い 声をかけた

『ねえ起もなさい』

すると数秒後

לען ען לען

といつ声をあげて起きた

私は名前を聞こえと声をかけよつとしたとき

スウウ

といつ襖の開く音が聞こえた

次の瞬間声をかけられた

「目が覚めたかい？？」

と聞かれた

私は警戒しながら

『アンタ誰？』

と聞いた

「私かい？私の名前は井上源三郎だよ
此処は新選組の屯所だよ」

此処が新選組の屯所

そうかだったら私は

トリップしてしまったんだ

『アヒ』

と私は言った

そして

井上といつ男は

「ちよつと来てくれるかい？」

と聞いてきた

『まあ・・・・ハイ』

と答えた

「君は如何かい？」

と女の子に聞いた

「えつ・・・・はい」

と彼女も答えた

そして私たちには廊下を出た

床を歩く

井上さんが幹部の名前を出す

彼女は納得いかないようだしなにしろ恐怖で怯えていた

部屋の前についた

「近藤さんつれてきたよ」

といった

「失礼します」

『失礼』

私はあんまり声を出さなかつた

「あなたと昨日の男が

「おはよう昨日よく眠れた?」

「あなたは…」

「…・・・・みたいだね 置の跡がついてるよ」

見かねた私は助け舟を出した

『「二つは来てない来てたら配でわかる』

と書いてやった

「やがてだ」マイクは、一回歩行つてなびこなー

と鳴った

別れのうどもよかっただ

だがやも咸にしなやかの元

「おひばりがやつた」

などと

むかつくやつだなあ

てこれが早くしてほしこ

と願つた

「で、そいつらが目撃者？ちちちゃんは『がんばり』なあ…まだガキじ
やん」

とチビが言つた

『テメエに言われたくねえよバカっぽい顔してる奴に』

「言われたもんだな平助」

「でもよやつらのねえちゃんは『がんばり』が強いな」

などと・・・・・

チビと露出野・バンダナヤローが口論している

「よやんか3人とも……。」

と怒りっていた

私はまだいいから

な思つてこると

「俺は新選組の近藤勇だ」

私はやつぱじと思つた

「ひうりの山南君が総長でその隣にいるトシ……、せいや、土方君が副長
を務めて……」

「……近藤さん何でいろいろ教えてやつたんだよ

「 もうか…」

漫才ですか？

どいつもこなご

「 口やがない者ばかりですみませんねえ」

『 テメエが一番やべえ雰囲気してんのにそんな事言つんだ』

「 おやおや初対面なのに失礼な方だ」

『 別に私は素直な意見を言つたままで』

「 もういいだる斎藤昨日の」と聞かせてもえりおつか

と土方といつ男が聞いた

第2夜～自己紹介～（後書き）

う～ん終わり？

第3夜～千鶴のお話～

「昨夜、京市中を巡回中に隊士たちが不定浪士らと遭遇。斬りあいになった後、浪士らを斬り伏せましたが、その折「失敗」した様子を目撃されています」

別にどうでもいい

私が死のうが悲しむ人はこの世界にはイナイ

「私たちはなんも見てません!!」

『ハア 別に私はどうでもいいんですけど』

「でもよおお前が『アレ』斬つたんだろ?」

と私を見て言うチビ

『セリフだけ』

「なつ私誰にも言こませんだからシ……」

「でもよお

「私まだ……

「？？何があつたんだい？話してみて御覧

「私の名前は雪村 千鶴といいます。私の父は蘭方医でした蝶に行くことになり文は毎日届いておりました。だけど突然文が来なくなつたのですそれで京へきたんです」

ふうん

だから何?

私は別に関係ないでしきう

「そうだったのか・・・そしてその人の名は何といつのだ?」

近藤つさんて情深い人だなあ

「雪村 緋道と言います」

「なんだとつ……お前ど」今まで知つていいる?」

フウン

なんかワケありね

「えつー? ?」

「トシシ彼が驚いているだろ？！」

えつ

もしかして氣づいてない

『ねえ彼女 千鶴さんは女の子』

・・・・・

えつと

筋肉君とチビと近藤さんが

「ええい……」

「そんな

「近藤勇一 生の不覚まさか君が女子だったとは・・・・・」

『『返ついてなかつたんですか』

で
話は進み

千鶴さんは保護決定つと

「さて次はお前だ」

『私も話すの?』

「話せよ」

土方ウザイ

『私の名前は紅月 夜宵』

「それだけか?」

『別に私が言った事を話しても信じるワケないし死んでもいいし』

「むつ

それより

「うか信じるから話を聞こいつ」

『へえそれホント?』

「ああなあ皆?」

「うん／ああ」

『せうだつたら話すよ私が知つてゐるすべてを』

そして私は語る

不可思議な語り物を

この世界に私が来たときにはもう

物語の歯車は狂つてしまつているのだから・・・

第3夜～千鶴のお話～（後書き）

えつとセリフが違つ所があると思ひますが大目に見てくんしゃい

『何故仁王口調？？』

テニーフリが好きな夜面でした

第4夜～嘘？ホント？～

私はため息交じりに言つた

『私はこここの世界の未来から来た

私には記憶がない

私は普通に学校ここでいう寺子屋から家にかけての帰り道だ

女人に声をかけられてさつきの刀

『月光華』と言う刀を預けられたいやあの女は私のと言つていたがな
そしたら狂い咲きの桜が目に映つて眠くなつて倒れて目が覚めたら
ここにいた

それで千鶴さんが悲鳴を上げて駆けつけてあの元人間らしいバケモノ
を斬つたつてワケ』

「嘘つくんじゃねえよ……！」

土方さんとかいうやつに言われた

私はキレた

『嘘？？？！！！！！俺がどんな心境でここにいるのか考えろよ
！！！！記憶がない俺を拾つて育ててくれた人がいた！！！！まだ
その恩も返してないのに目が覚めたら過去にいたたつたそれだけ
の事でもな！！！！あの人たちは俺の親搜してくれてたんだ！！』

私は一気に行つた

『気が収まらない
イライラしていく

「土方さんやめろーーー！俺はそのことを信じる

「何言つてんだよ左ノー！ー！」

「そりだーー！」

『？？』

私は分からなくなつた

何故この人が私の肩を持つのかが

「「コイツが言つてることはまちがつてないとおもうぜ?」

本人も気が付いてないけどよ

寂しそうな切なそうな顔してたんだよ

目もそうだった

おれはそつ思つぜ」

そうだつたのか

気が付かなかつた

この人は人の事をよく見てくれてる
なんだか嬉しい

「僕もそう思うな だつてこの子切なそうな雰囲氣出してるもん」

この人も・・・

「私もですよ。初対面なのにあの物言いは驚きましたが紅用さんは
嘘を付いてるようにも見えませんでした」

山南さんまで・・・

「私も信じよつ」

近藤さんまでか

『ありがとう（微笑）そしてさつきキレイでじめんなさい』

私は笑みを浮かべていた

そこで製麺してる彼らにも気が付かず・・・

第4夜～嘘？ホント？～（後書き）

うん

終わつた

なんかめんどいなあ～

学校が・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474z/>

薄桜鬼～鬼姫と呼ばれる鬼～

2011年12月16日19時13分発行